

第53回送別会

(農薬化学～生物調節化学)

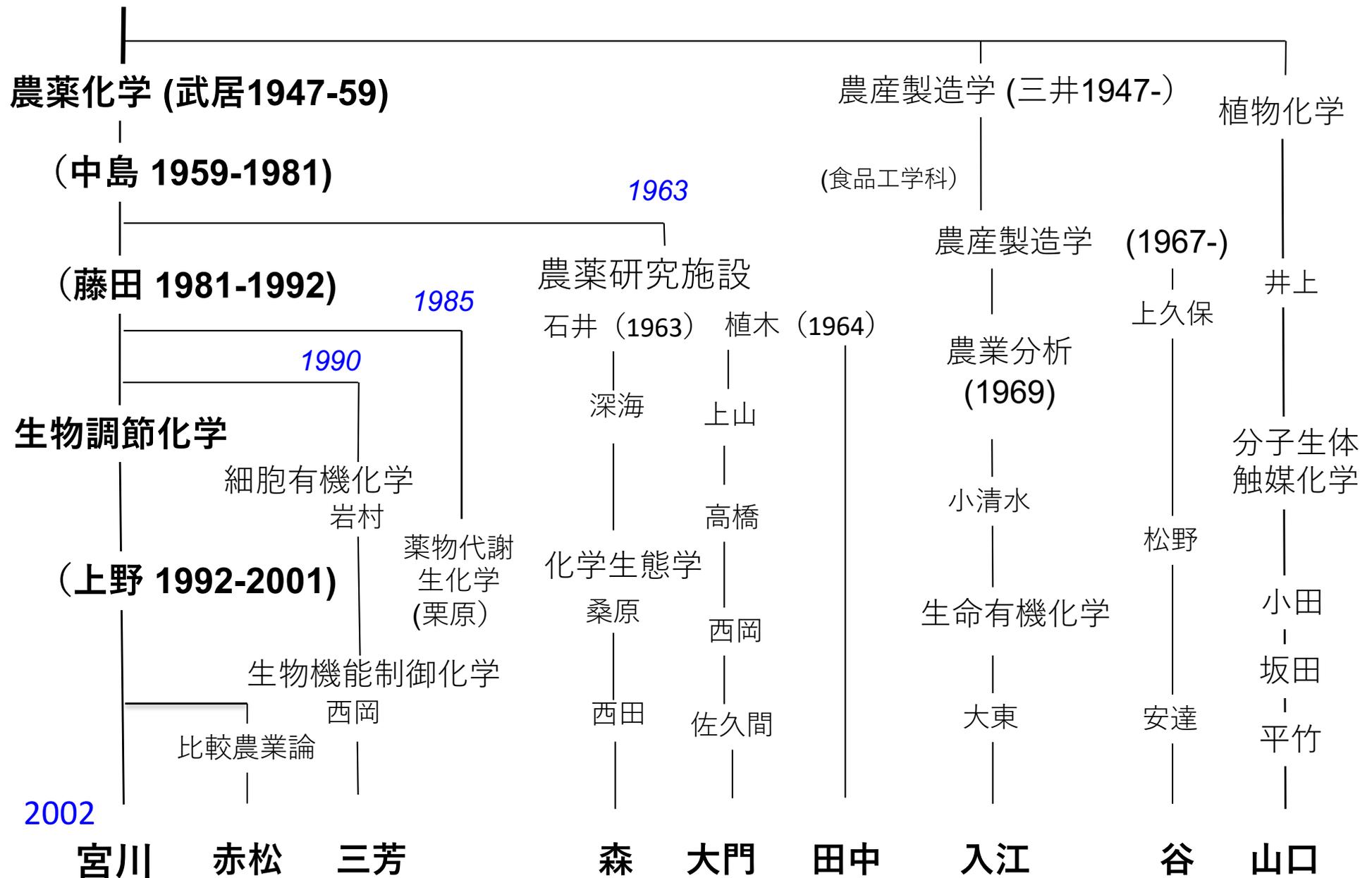
2019年2月9日 (土)

ウエスティン都ホテル

式次第

- 開会の挨拶 12:30 -
- 宮川教授の挨拶
- 卒業生の紹介
- 研究室の歴史と深海先生のご紹介
- 深海浩先生から祝辞
- 乾杯 13:00 -
- 歓談
- 藤田先生， 上野先生を偲ぶ催し 13:30 -
- 歓談
- 閉会

農産製造学講座：武居三吉 (1925 -1967)





初代教授（武居三吉）



2代目教授（中島 稔）



3 代目代教授（藤田稔夫）



4 代目教授（上野民夫）

京都大学名誉教授 深海浩先生



2014年2月 (ホテルオークラ)



2019年2月2日

2

黄昏雑感
(6)

長であったのがわれら（京都大学農学部農芸化学科同窓）の先輩の思い出の一文を綴って紹介したい。

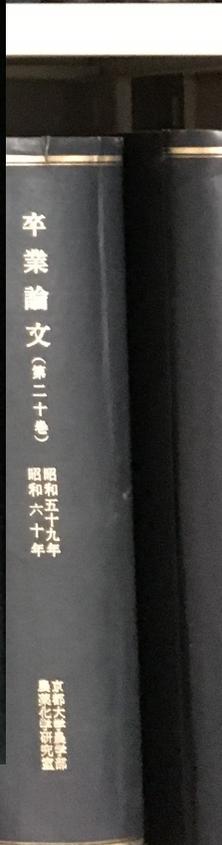
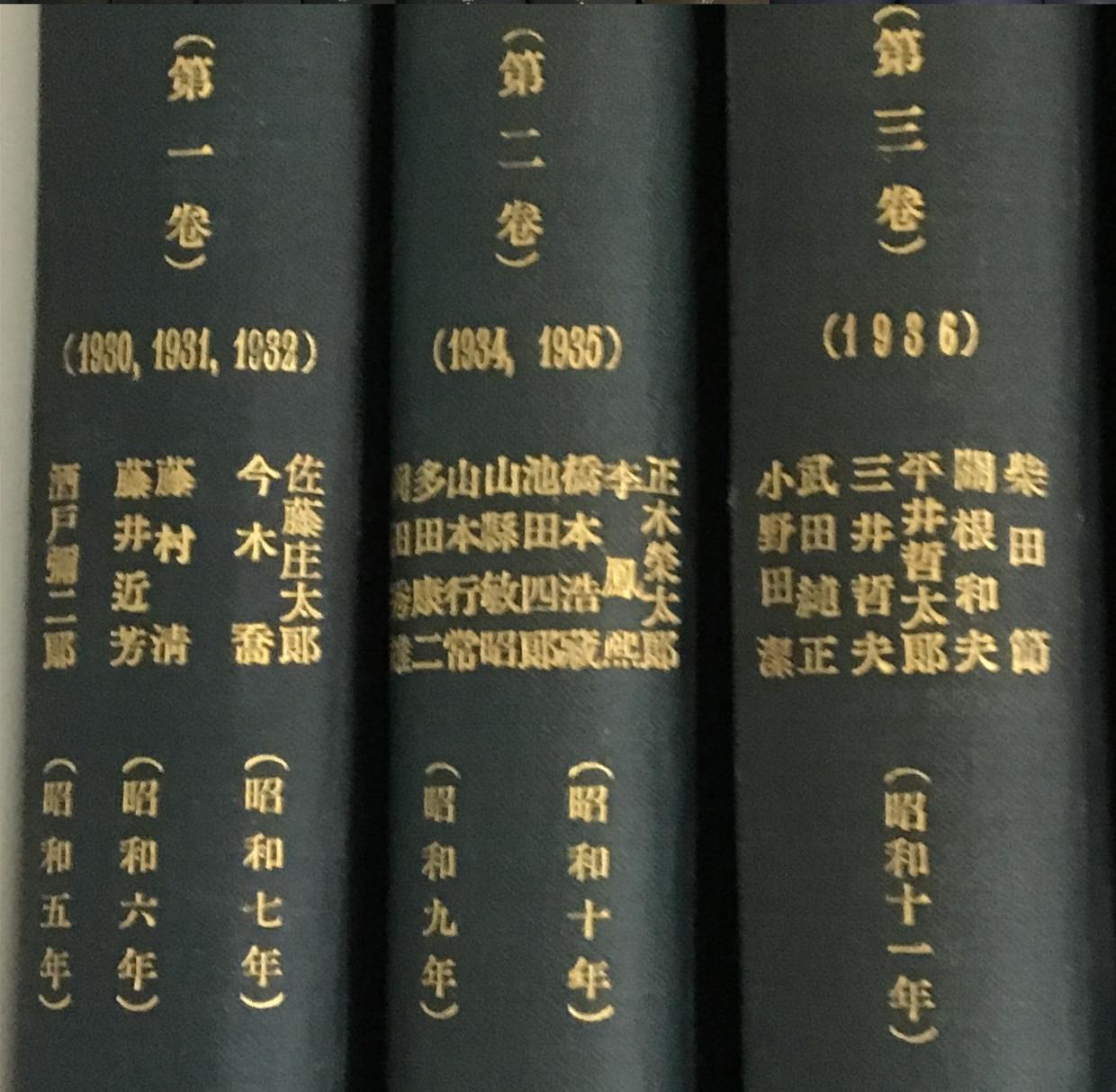
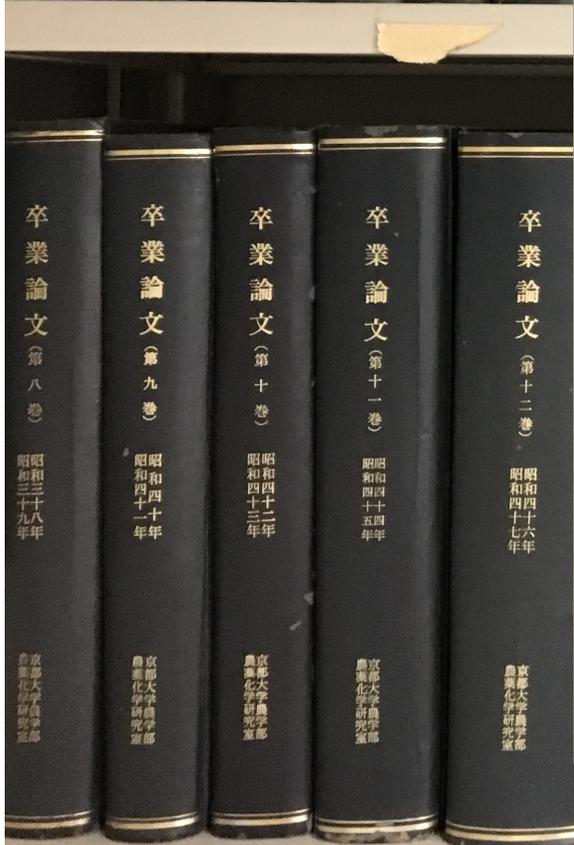
今年の一月十七日の京都新聞朝刊に宇治にある京都茶業研究所のリニューアル工事が完成して、記念式典が催されたとの記事を見て、懐かしい思い出に耽り、挙句の果てにこの文章綴った。戦後もない一九五〇年代、その所の尊称であった。この偉大なやじさんはヒマラヤへの憧れ

（生）の大先輩「酒戸弥二郎」昭和の初期、京都帝国大学農学部農芸化学科同窓であった。しかし、われわれ農学部の三回生になったやじ

後輩はだれもが「やじさん」と呼んで、本名をいう人はいなかった。飄々とした立ち居た。武居研は茶などの香气成分を研究課題にとりあげていた。その当時の有名な伝説に、

振る舞いがそうさせたのであって、それはむしろ一種独特なやじさんはヒマラヤへの憧れ

2018年2月頃



卒業論文 第1巻 第1号

抹茶貯蔵 = 関スル研究
(第一報)
昭和五年三月

卒業論文

酒戸彌 = 郎

緑茶ハ醗酵セザルガ故 = 紅茶 = 比シテ貯蔵中ノ変化著シキモ /
アルニモ不関 從來ノ貯蔵 = 関シテハ深ク考究セタルモ / 無ク如何 =
密封スルニテ翌年ノ製茶 = 比スル時ノ香氣、滋味、色澤、木色
共 = 著シク変化スルヲ免ス。貯蔵法ノ概柁ヲ摘記スベシ次ニ如シ。

往時ノ貯蔵法

製茶治質ヲ保存スル上 = 於テ光線、高温、及濕氣ノ害、
密封ト冷蔵ノ有效ナル事ハ古クヨリ知ラタル事ニシテ往時山城
ノ茶葉家ハ新茶ヲ陶器ノ茶壺ニ入レテ密封シ愛宕山ノ石室
ニ入レテ夏季ヲ過シ九月ニ到リテ壺開キヲナスヲ常トセリ。
茶壺 = 此ノ貯蔵法ハ明治廿年ノ頃マデ用ヒラレシモノニシテ
製茶ヲ信樂ノ焼ノ狭口ナル大壺ニ充満シ木蓋ヲ附シ
ソノ上ヲ紙ニテ封シテ貯蔵セシモノナルモ、壺ハ高價ニシテ取
扱不便ナルヲ瘠セシト利右衛門氏ノ考案ニシテ現今用ヒ
ラルル如キ杉板製ノ内面 = プラキ板ヲ附セル茶箱用ヒラルルニ
到リ。

現在ニ於ル貯蔵法

現今一般ニ行ハル貯蔵法ハソノ製法、貯蔵期間、目的及ヒ
地方ノ風習ニテ差異アルモ凡ソ次ノ如ク大別スルヲ得ベシ。

輸出向製茶貯蔵法

輸出向ニテ大量的ナルモノハ杉板製茶箱 = 錫葉袋ヲ裝置
セルモノニシテ製茶ヲ詰メ白鐵ニテ密貼シ、蓋ノ目貼リヲナシ
更ニ濕氣ノ侵入ヲ防ク爲、目貼リノ上ニ桐油ヲ塗リ
アパツトテ包ニテ輸出ス。最も普通ナルハ80封度入ナルトス。
少量ノ茶(1/4, 1/2, 1封度)ノ輸出 = 從來漆器用ヒラタル
事アルモ近時瘠タル茶罐ニハ鉛皮ヲ用ヒテ木ハ紙ノ蓋ヲ
ナセルモノ用ヒラレ、下等茶 = 在リテハ紙袋ニシテ(紙袋ハ
主シテ西洋紙ヲ用ヒ、内側 = 錫葉袋ヲ裝置セルモノアリ)
輸出ス。

地方向製茶貯蔵法

普通農家ノ製造後直チニ取引ヲナス故ニ貯蔵法 = 意ヲ用ヒス

Polarographically Controlled Synthesis

に関する研究

— *o*-Chloroacetophenone の電解還元 について —

卒業論文：1952年（昭和27年）

深 海 浩

第一章 緒 論

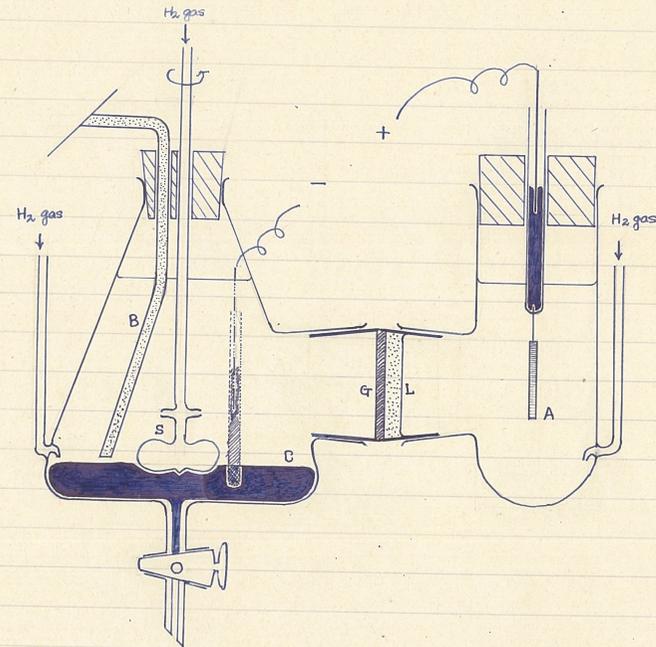
多くの不飽和有機化合物はポ-ラログラフ法に依る電解還元の際に所謂還元波を示す事が知られて居り、此の分野では種々の観点から検討が加えられて数多くの報告がなされて来た。然乍ら、その際の還元生成物に関しては推測が下されてゐるに過ぎず、実際に還元生成物を単離し確認してゐる例は余り多くない。

ポ-ラログラフ法が、小さい表面積を有する滴下水銀陰極を使用し、而して、流れる電流が微弱で、その操作時間程度の範囲では被還元物質の還元される量は極めて少く、操作前後に於て被検物質の濃度が殆ど変化しない事を特徴としてゐる以上、ポ-ラログラフ法の装置その儘を還元生成物の単離の目的で使用することは莫大の時間を必要とすることになる。^{註1)}

J. J. LINGANE¹⁾は陰極の表面積が大きくなり、而して攪拌されてゐる水銀を用ひ、且つそれを常に一定の電位に保ち得る装置を考案した。勿論此の様子條件の陰極に依る電解が、その被還元溶液の組成が時々刻々変化してゆく以上、厳密な意味で滴下水銀陰極を使用したポ-ラログラフの場合と全く等しい条件下にあるとは言へないが、併し、電解の還元生成物を

註 1) 芳賀, G. SEMERANO. [Z. für Elektrochem. 44 (1938) 598] は Aconitic acid に就いて滴下水銀陰極を用ひて、その半波還元電位より稍、負の電位に陰極を保つて一連の電解を行ひ續けた。然乍ら、それでもして、還元生成物は単離出来ず、少量でしかつた。

と取換へた。之と同様の陰極水銀も操作毎に取換へて、3% -HNO₃ aq. solu. で洗滌し、水分を取去つて pin hole 濾過を繰返して精製したのみで次の使用に供した。



第 2 回 電解槽

- | | | | |
|---|---------|---|----------|
| A | 白金陽極 | B | 滴電極への塞天橋 |
| C | 水銀陰極 | S | 攪拌器 |
| G | ガラスストップ | | |
| L | 塞天橋 | | |

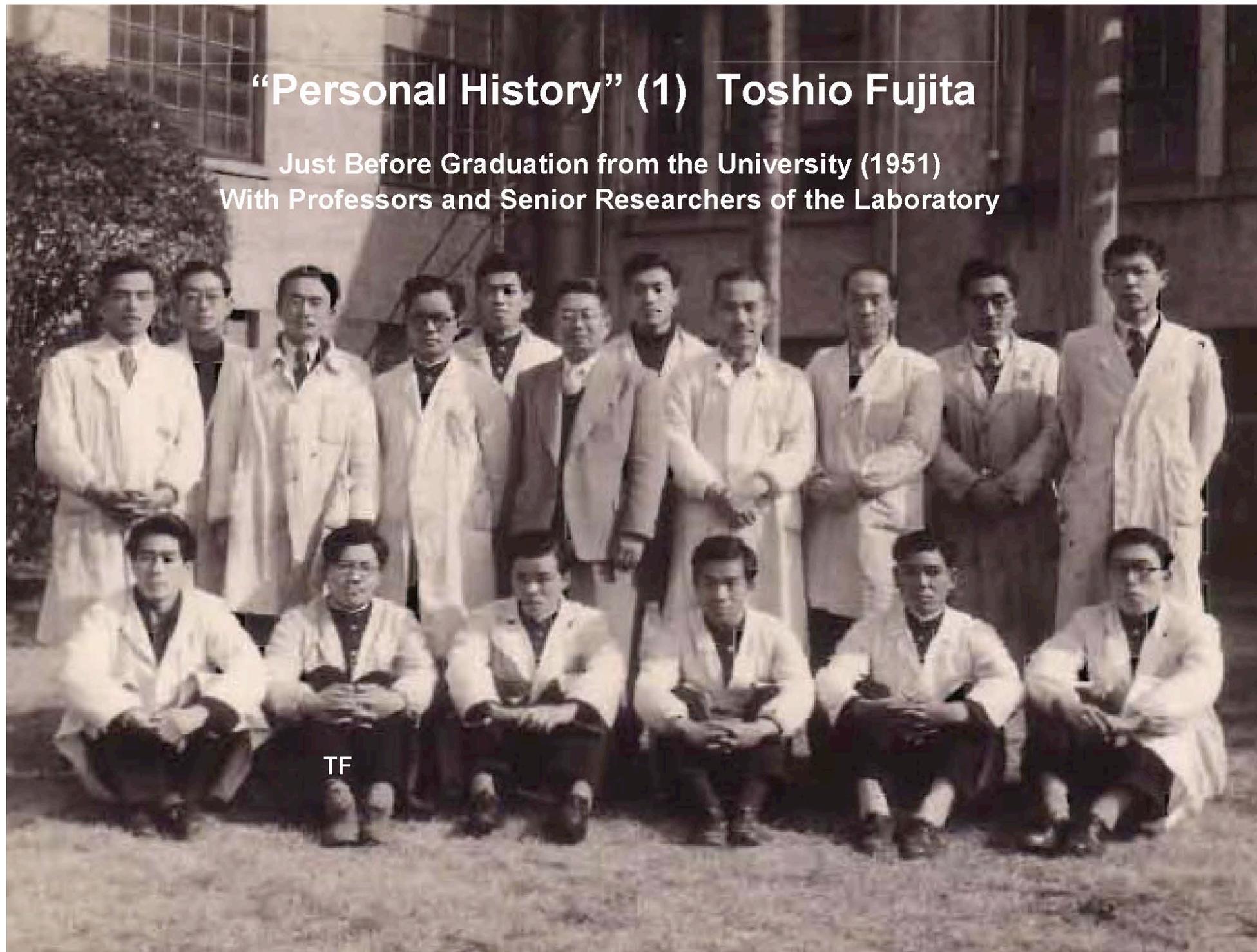
藤田稔夫先生， 上野民夫先生を偲ぶ

藤田先生（2017年8月22日逝去）

上野先生（2018年9月19日逝去）

“Personal History” (1) Toshio Fujita

Just Before Graduation from the University (1951)
With Professors and Senior Researchers of the Laboratory



TF

1960年（第1回研究室旅行）

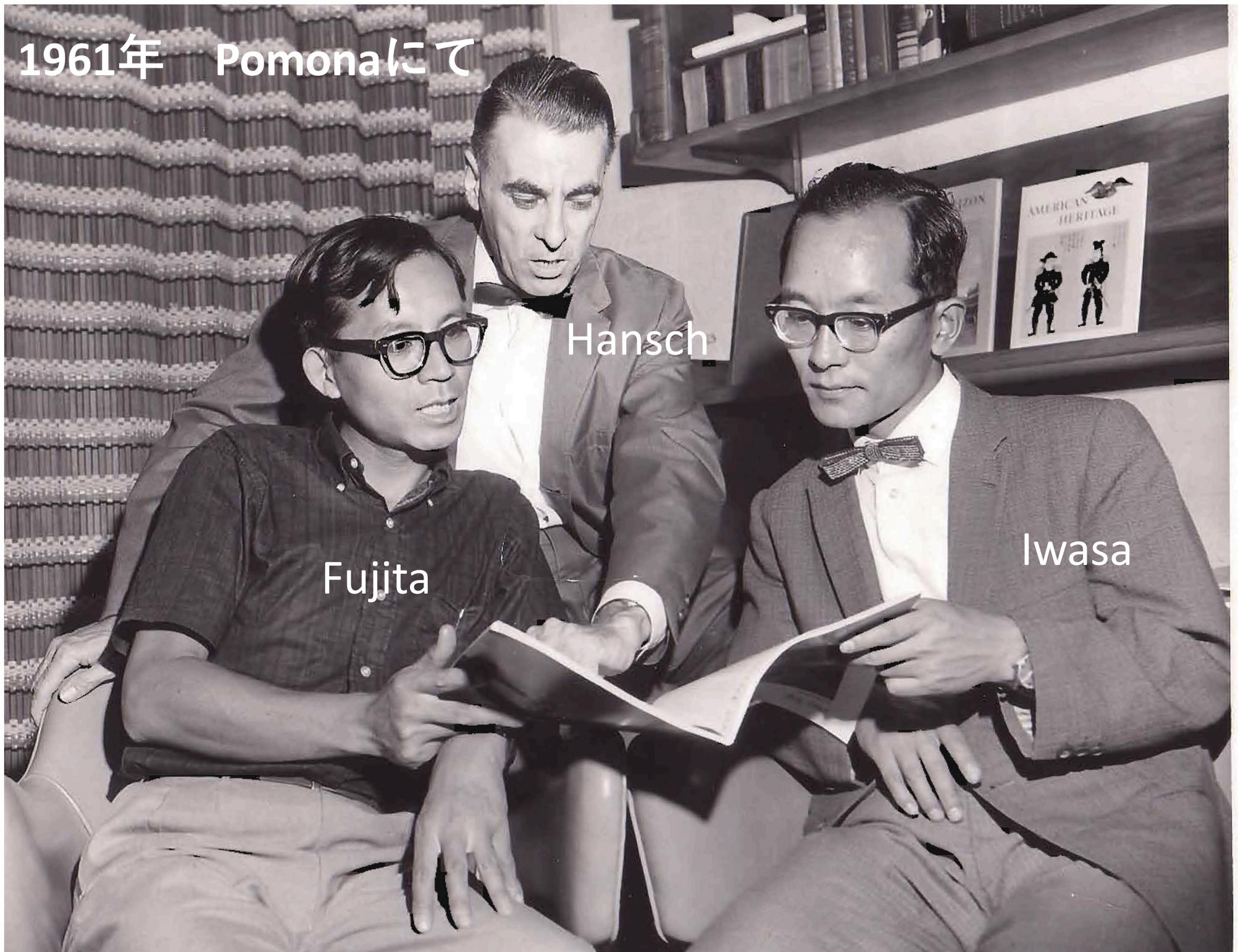


1961年 Pomonaにて

Hansch

Fujita

Iwasa



坂田太助
 清水純夫
 畑中顕和
 長谷川明
 中島先生
 平田工場次長
 井上製造部長



入江 三
 柴田 久夫
 萩野 健彦
 栗原 紀夫
 清水 二在
 深海 浩
 安藤 慶男
 坂田 元三
 小田 貞

1961年第3回 7/30-8/4 (池の平～日曹 本木工場
 ～ 野尻湖～志賀高原)一



1962年6月 (秋吉台にて)

第6回 (1964年8月3日-5日) 天狗の湯にて

荒木中島 竹下深海 上野 高野 桑原 徳田 栗原 柴田 坂田 橋本
小田 本田 富田 黒川 清水





第7回研究室旅行 1965年8/3-8/5

19##年



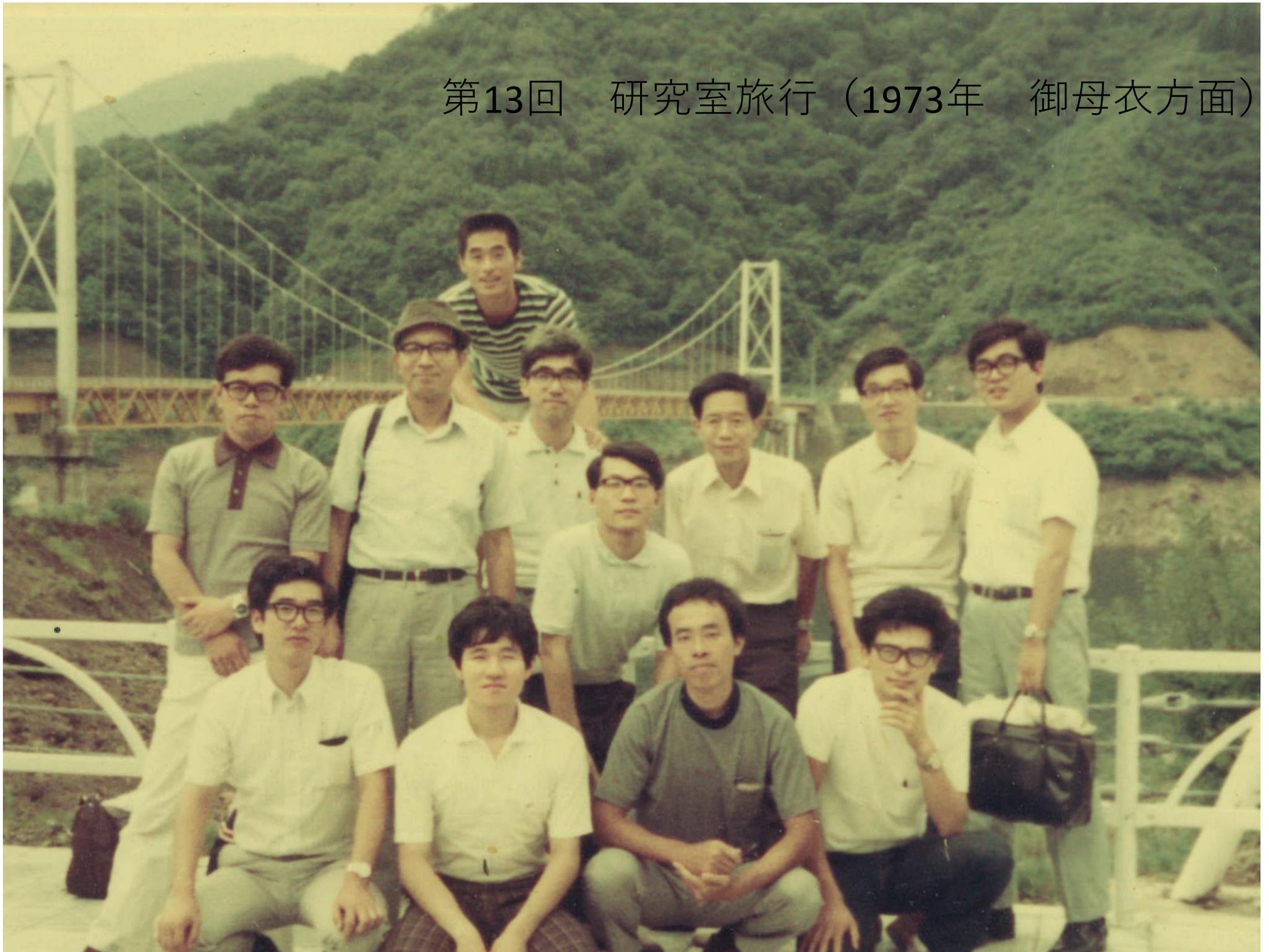
第12回 (1972年 8月2日～4日)
富山～黒部～霧ヶ峰



第14回 農薬夏の旅行 (1974年 8/1-5 南四国)



第13回 研究室旅行（1973年 御母衣方面）



1977??



1979年農薬化学研究室ハイキング
山科音羽川上流から醍醐寺へ



第19回研究室旅行（1980年8月20日～24日）
（志賀～草津～軽井沢）



1980年12月 農学部屋上にて





六成会 オリエンテーリング

1984年 研究室旅行



1986年研究室旅行 (黒部ダムにて)





藤田稔夫先生ご快癒・ご受賞記念祝賀会 1989.2.19

1990年 藤田担任クラス（緑紫会）3回生東京企業見学



1990年度 生物調節化学新歓



1992年 3月 藤田先生退官記念パーティー



1993年 上野研究室 (舞鶴)



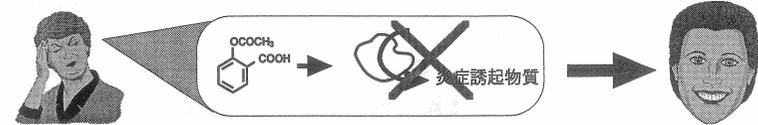
1994年3月？

生物調節化学研究室（略称「セイテヨー」）

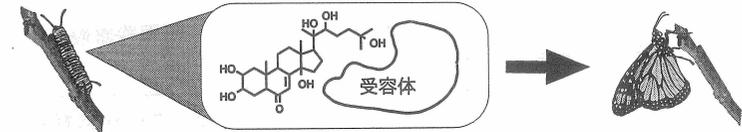
構成員 教授：上野民夫 助教授：宮川 恒 助手：中川好秋 事務補佐：半井里佳
 大学院博士後期課程：4名 大学院修士課程：8名 専攻4回生：7名

私たち生物の生命はタンパク質や核酸などの巨大分子の機能によって維持されています。しかしそれらの機能は、「小さな」化学物質によって調節されています。

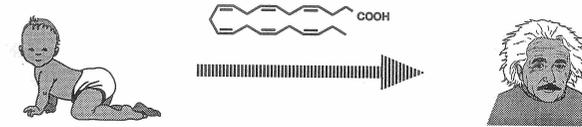
- 例えば、風邪薬に含まれるアスピリン。人間の体内に炎症をひきおこす物質をつくる酵素の働きを阻害し、その結果熱が下がります。



- 例えば、昆虫の変態を引き起こすホルモン。受容体タンパク質に作用し、その刺激が引き金となって芋虫は蝶へと変身します。



- 例えば、魚に多く含まれるDHA。食べると頭がよくなると言われています（???)



私たちは、

- さまざまな生命現象はどのような「小さな化学物質」に制御されているのだろうか
- 「小さな化学物質」は、どのようにして巨大分子の機能を調節し作用を現すのだろうか
- 「小さな化学物質」の作用ということに関心をもっています

具体的には

- ◇ 植物はなぜ病気になるのたージを与えるからではない何？どのようにダメージを
- ◇ 病気になるない植物もある原微生物の感染をすみやかにするからではないか？→どの制の発動に使われる？
- ◇ 農作物を効率よく害虫の被害を減らすのいいのだから→昆虫に特有の調節機能はないか？→その調節調節できる？
- ◇ 天然にはどんな化学物質がネットワークをもった化合物

というふうに考えて研究を進めて

「小さな化学物質」エタ



1994年 8月23日 (ワシントンにて)



1995年？



1996? 1997年 春のハイキングーBBQ





2001年4月7日

上野民夫教授退官記念観桜会



野民夫教授退官記念



藤田先生80才(傘寿)お祝い (第25回藤田カンファレンス)



KKRホテルびわこ; 2008, 9/6-7

麺類をかべ

2010年研究室旅行



2012年送別会

京都大学農学部生物調節化学研究室送

天野拓雄，明日香夫妻

ダブル浩



2012年 研究室旅行（伊勢，鳥羽）





2013年 2014年
春 八瀬でBBQ



2014年 三条



上野先生 喜寿のお祝い

2014年10月25日 (南禅寺 順正)



2015年



2016年 研究室旅行（小豆島）



2017年 研究室旅行





2018年 研究室旅行（世界遺産めぐり）

谷瀬の吊り橋～高野山～熊野古道～那智大社

